

【旧約聖書日課】箴言 3章13～20節

- 13 いかにかに幸いなことか
知恵に到達した人、英知を獲得した人は。
- 14 知恵によって得るものは
銀によって得るものにまさり
彼女によって収穫するものは金にまさる。
- 15 真珠よりも貴く
どのような財宝も比べることはできない。
- 16 右の手には長寿を
左の手には富と名誉を持っている。
- 17 彼女の道は喜ばしく
平和のうちにたどって行くことができる。
- 18 彼女をとらえる人には、命の木となり
保つ人は幸いを得る。
- 19 主の知恵によって地の基は据えられ
主の英知によって天は設けられた。
- 20 主の知識によって深淵は分かたれ
雲は滴って露を置く。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 11章33～36節

- 33 ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう。
- 34 「いったいだれが主の心を知っていたであろうか。
だれが主の相談相手であっただろうか。
- 35 だれがまず主に与えて、
その報いを受けるであろうか。」
- 36 すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。
栄光が神に永遠にありますように、アーメン。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 10章31～42節

- 31 ユダヤ人たちは、イエスを石で打ち殺そうとして、また石を取り上げた。32
すると、イエスは言われた。「わたしは、父が与えてくださった多くの善い業をあなたたちに示した。その中のどの業のために、石で打ち殺そうとするのか。」
- 33 ユダヤ人たちは答えた。「善い業のことで、石で打ち殺すのではない。神を冒

洗したからだ。あなたは、人間なのに、自分を神としているからだ。」³⁴そこで、イエスは言われた。「あなたたちの律法に、『わたしは言う。あなたたちは神々である』と書いてあるではないか。³⁵神の言葉を受けた人たちが、『神々』と書かれている。そして、聖書が廢れることはありえない。³⁶それなら、父から聖なる者とされて世に遣わされたわたしが、『わたしは神の子である』と言ったからとて、どうして『神を冒瀆している』と言うのか。³⁷もし、わたしが父の業を行っていないのであれば、わたしを信じなくてもよい。³⁸しかし、行っているのであれば、わたしを信じなくても、その業を信じなさい。そうすれば、父がわたしの内におられ、わたしが父の内にいることを、あなたたちは知り、また悟るだろう。」³⁹そこで、ユダヤ人たちはまたイエスを捕らえようとしたが、イエスは彼らの手を逃れて、去って行かれた。

⁴⁰イエスは、再びヨルダンの向こう側、ヨハネが最初に洗礼を授けていた所に行き、そこに滞在された。⁴¹多くの人々がイエスのもとに来て言った。「ヨハネは何のしるしも行わなかったが、彼がこちらについて話したことは、すべて本当だった。」⁴²そこでは、多くの人々がイエスを信じた。

神の子！【こども説教のために】

教会でぜひ実現したいと思いつながら、なかなかできないことがあります。「ぶどう狩り遠足」です。わたしたちの生活の中でぶどうは、お店で買ってくる果物の一つに過ぎないかもしれませんが、けれども、『聖書』の中には、繰り返しぶどう園の話やぶどうの木の話が出てきます。

主イエスは、「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である」(ヨハネ 15:1)とおっしゃり、また、「…あなたがたはその枝である」(同5節)とおっしゃいました。「父がわたしの内におられ、わたしが父の内にいる」といつもおっしゃられていた主イエスは、御父のことをぶどうの木の世話をする農夫にたとえられたのです。弟子たちにそうお語りになられたとき、主イエスと弟子たちは、ぶどう園を通り抜けられていたに違いありません。弟子たちは、「まことのぶどうの木」の主イエスにつながる「枝」です。農夫である御父に世話をしてもらって「実を結ぶ」ようにされるのです。

主イエスが、ご自分の業、お働きとしてなさったことは、そのように弟子たちが「実を結ぶ」者になるためのものでした。それが、御父である神の御心なのです。ぶどう園の農夫がぶどうの実が結ぶことを願い、喜ぶように、御父は、わたしたちが良い実を結ぶことを御心とされているのです。その御父の御心と一つに、主イエスは弟子たちのために、またわたしたちのために、お働きくださったのです。御父の子、「神の子」としてお働きくださったのです。わたしたち皆が、御心のままに良い実を結ぶ「神の子」となるためです。

神の言葉を受けた人たち

先週、一年ぶりに出身神学校に出向いて会合に出席してきました。「神学生出席教会の牧師と教授会の懇談会」という会合です。毎年この時期に開催されています。夏休みが明けての始業日に合わせて開催しているのだそうです。教授方がそろって学校に集まるその日に開催するのが都合よいのでしょう。その会合で、短い時間でしたが発題をさせていただく機会が与えられました。もう一人並んで発題された牧師は、わたしの神学校同期の方でした。会合には、教授となられている方も含めて同期が四人出席しており、同じ頃に学んだ方々も少なくありませんでした。神学校卒業から25年目、かつて教会と神学校に育てられる神学生であった者たちが、今は、神学生を育てる立場でそれぞれに働きを担う者とされているのです。

会合では、牧師の同僚たちと共に、神学生を育て、また彼らが卒業した後には牧師として育てていく働きについて、あらためてさまざまな課題を共有してきました。その中で、あらためて気づかされたことは、神学生を育て、また牧師を育てるのは、何も先に牧師になった者たちばかりではない、ということです。むしろ、神学生や牧師たちは、教会の交わりの中でいつのまにか育てられているのです。牧師たちや神学校の教員が意図して指導したように育っていなくても、日々の教会生活の中で、神学生や牧師たちは育てられ、成長させられているのです。

主イエスがユダヤ人たちとの議論の中で、「**神の言葉を受けた人たちが、『神々』と言われている**」とおっしゃいました。詩編を引用しておっしゃっているのです。「わたしは言った、『あなたたちは神々なのか、皆、いと高き方の子らなのか』と」（詩82:6）。この詩編は、不思議な場面を描くことから始まっています。「神は神聖な会議の中に立ち、神々の間で裁きを行われる」（同1節）。神が御前に集う者たちの会議の中で御言葉をお語りくださっている、その御言葉を受けた者たちは、「神々」と呼ばれ、「神の子」と呼ばれている。主イエスは、そうおっしゃられるのです。

「ヨブ記」には、神の御前に天使やサタンが集う会議がなされている様子が描かれています（ヨブ1~2章）。けれども、主イエスは、神の御前に集うのは、ご自身であり、またご自身に導かれる弟子たちであるとおっしゃられました。御前に集い、御言葉を聞き、御心を行うことこそ、主イエスが弟子たちを導かれ、実践なさったことでした。そうする者はだれでも、「わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」（マルコ3:35）とさえおっしゃいました。

牧師たちは、御言葉を聞き、語ることに専念させていただいている者たちです。けれども、御言葉を共に聞いて、御心を行うのは、教会です。教会の交わりに加えられ、御前に礼拝をささげる皆さんに他なりません。

すべてのものは…

「信徒の友」誌 10月号に、石神井教会の皆さんの信仰の姉妹である、わたしどもの娘の記事が掲載されました。「牧師の子ども・パスターズキッズに生まれて」という連載記事です。最近、牧師の子として育った者のことを PK と呼ぶことがあります。信徒の子として育った者とは違う葛藤があるということが問題として取り上げられるようになったのです。

牧師の中には、親も牧師という方が少なくありません。わたし自身は信徒の子ですが、伝道師は牧師の子です。10月の神学校日にお迎えする予定の神学生も牧師の子です。わたしは、牧師として自分の子が牧師になることを目指したら、まずは考え直すように促すと思いますが、世の牧師たちはそうでもないようです。もちろん、親の職業を見て育った子が同じ職に就きたいと願うことを喜ばない親はいないでしょう。けれども、わたし自身は、牧師を職業だとは思わないのです。教会に集められた者たちが、できれば全生活をささげても実践したいことを、現実には日々の生活のためにできない代わりに、仲間の一人を選んでその実践、教会の働きを託している、それが牧師の役割です。牧師と信徒の違いは、役割の違いです。役割は違えど、神の御前に集い、御言葉を聞き、御心を行う者として生きようとする者たちの交わりの中にある一人ひとりであることに、違いはないのです。わたし自身は、牧師になるとき、母教会の仲間たちに「お前には、自分たちができないことをしてもらおう」と言って送り出してもらったのです。本人の献身の意志は揺らぐことがあるかもしれませんが、牧師として教会に仕えるための能力や働きに問題がある場合もあるかもしれません。それでも、その人を献身した伝道者、牧師として立て、育て、用い続けるのは、教会なのです。教会の交わり、教会に連なる皆さん一人ひとりなのです。

主イエスを「**神の子**」と認める者と、そうでない者とがいました。主イエスを「**神の子**」と認めた弟子たちは、彼ら自身「神の子ら」として生きるようにされました。「神の子ら」として生きるようにされた弟子たちは、「**神の子**」である主イエスと一つにされること、自分たちも御父と御子との交わりの中に生きることを、良しとしてきました。そこに、何の分け隔てもない神の御心があると信じるようにされてきたのです。

パウロは、ユダヤ人と異邦人の間に何の分け隔てもされない神の御心があると知ったとき、そこに、決して人には理解し尽くせない神の御計画があると悟って言っています。「ああ、**神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう**」。わたしたちも、御前に集う者たちとして、告白するのです、「**すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。…アーメン**」。